

松下幸之助に学ぶ!!

『繁栄による平和』

第一回

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

(徳島PHP友の会顧問)

(H/PPHAG&

『菜根譚の会』世話人)

世界のスポーツファンの衆目を集めたなか、日本チームが予想を上回る成果を挙げ【Rio】オリンピックは成功裡に終わった。次はパラリンピックである。各選手の躍進と4年後の【Tokyo】にも

期待したい。熱闘甲子園・高校野球大会も済み、ようやく国民が政治経済の動向に関心を寄せだしてきた。間もなく民進党の代表選挙もあるが、安倍第二次内閣が改造人事を終えて

『未来チャレンジ内閣』と銘打って、いよいよデフレ脱却に向けた仕上げに入る? ようである。国債増発も加えた28兆円に及ぶ活動資金を加えて大盤振る舞いが始動しようとしている。

モノが溢れた供給過剰状態では『デフレ脱却』を超え悪性インフレへの引き金にはならないと思うがこれでよいのだろうか。

よい社会⇄平和社会

戦後、PHP活動を始めて『物心両面の調和がとれた豊かさがよい社会をつくっていく』という松翁の考え方を示したことについて、論じ合われた青木・佐藤両氏

は当時混乱していた社会情勢のなかで、如何にして経営の危機を脱していったかを、語り合った。

【税金について…】

青木社長

「松下電器は戦後倒産の危機に瀕してから、また一気に回復します。そのあと日本企業でナンバーワンになるわけですね。その転換点が幸之助さんが五五歳の時ですか。」

*以下()内は筆者補足
佐藤専務

「そうですね。昭和二五年の七月にPHP研究を一時中断して松下電器の再建に専念するようになり、その時ちょうど朝鮮動乱が起こりまふ。この戦争特需が大きかったですね。それで昭和二七年に初めて長者番付のトップになって、そのあと、昭和三〇年代は二回をのぞいてずっとナンバーワンです。」

(当時)税金を八〇%以上取られていましたが、それでもいつい節税はしませんでした。実は創業後五、六年経った大正二二、二三年ごろ、

幸之助は税務署との見解の相違から相当多くの税金を払わなくてはならなくなり、悩んだことがあって、それ以来、お金は国のものだと腹を決めたのです。たまたま今は自分が持っていて事業をやっているけれど、もともとは国のお金なんだから、国のお金を国が取ることに対して自分が悩むのはバカバカしい話だと、二晩ほど寝ないで悶々^{もんもん}と考えて、そういう結論に至ったのです。」

(現在では、最高税率三九→四〇%に半減?)

青木社長

「アチーブメントはグループ経営で連結決算をしているのですが、先日麹町税務署、品川税務署、麻布税務署の三つの管轄税務署から、連結決算でいつい正告なし、というお墨付きをもらいました。」

九人の署員が入って、九月から三月まで徹底的に調べていって、是正勧告はまったくなし。税理士の先生が『日本でも初めてのケースではないか』と驚くほどでした。



自慢ではありませんがそれくらい税金はきっちり納めているのです。

こういうことは大事だと思えます。スポーツの世界でもそうですが、日本は世界でいちばん違反が少ないといわれています。スポーツは勝ち負けの世界なので、サッカーでも、審判にわからないよう主力選手の足を傷つけたりするんですよ。でも日本はやりません。それでもなでしこジャパンは世界で優勝したじゃないですか。やはりルールを守って、正しいことをするのが大事だと思います。

私も公明正大に経営し、税も喜んで納めています。絶対にごまかしてはいけません。私は六本木にある自宅も自分で買いました。普通は会社に貸して、家賃の半分を払わせるとか、いろいろなやり方が合法的にできるのですが、私はそれをしませんでした。自分で買って自分の所有にした。

家を私有すると、担保になります。担保になるから

資産が増える。中小企業にとつて、経営者の資産は会社の生命線になります。今は会社にあるコピー機まで連帯保証の対象になってます。上場したとき初めて担保がはずれるんです。

世の中にはシンガポールや香港やバミューダ海域に法人をつくって、税金をいかに払わないようにするかという経営者もいます。そんなことをしたら国家に納税してないことになるではありませんか。国が栄えません。」

佐藤専務

「幸之助は、お金はもともと国家のものだから、税金について悩まないと決めてからは、たくさん稼いで、たくさん収めることをよしとするようになりました。そして企業の社会的責任として、次の三つをあげるようになったのです。一つ目は本業を通じて世の中に貢献する。二つ目は適正な利益をあげ、その利益を税金として納めて国家社会に還元する。三つ目はそうした企業活動が

世の中と調和していくという、この三つです。

今はさかんに企業の社会的責任をいいますが、幸之助は昭和四〇年代の頭ぐらいにはそういう言葉を使っています。さらに企業の社会性については、昭和二年にすでに企業は公のものだといっています。」

青木社長

「今聞いても新しいですよ。会社が誰のものかというところの公のものだとおっしゃった。たしか二七歳の時でしたよね。企業は公の人、公の資本を使って経営されている。だから利益を社会に還元しなければならぬ。」

佐藤専務

「幸之助は『資本は天下の資本であり、働く人は国家の国民である。その天下の資本を使い、国家の国民を使って事業を行なって利益が生み出せないということ』は許されぬ」ともいっています。」

青木社長

「しっかり稼いで、しっかり利益を出し、それを社会に還元

元していくのが会社の役目だということですね。」

【平和をつくるのは…】

佐藤専務

「青木さん自身は平和についてどのような考えをおもちですか。」

青木社長

「私は能力開発の視点でしかわかりませんが、すべてはマザー・テレサの『家族を愛しなさい。そうすれば地球は平和になります』という言葉に象徴されているように思います。家族を愛せない人を調べた研究によると、共通していたのは低い自己概念、自己憐憫といった憎しみの世界観だったそうです。

不平、不満、不信、ねたみ、嫉妬心など、これらはみなマインスの観点です。そうなると、究極、人間は自己中心的になつて、家族すら愛せなくなるそうです。

だから私は平和の原点はバイブルにある『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』につきると思います。まずは自分を愛する。この

健全な自己概念、自分を愛し、大切にして思いやること

が基本です。なぜならば、自分は自分だけのものではなく、親から見れば自分の命を擲(なげ)つても守りたい存在だからです。そういう自分なのに親の愛を忘れてしまつて、自分を自分で粗末にする。自分を認められないから、人も大事にできないし、承認できないのだとすれば、まずは自分を肯定することが平和の出発点だと思えます。

これを私は『インサイドアウト』といっているのですが、まずは自分から。あるいは社会でいえば、まずは家庭から。ここをきちんと大

事にしてそれから社員、取引先や地域社会、国家、最終的には世界の人々というように広げていくのが平和の広がり方です。インサイドつまり自分や家族を大切にできるから、他人や他人の家族も大切にできる。自分の国を大切にできるから、よその国も尊重できるんです。」(つづく)